

I B Aエムシャーパーク
(I B Aエムシャーパーク構想)

平成20年1月30日(水)

[面談者]

アンドレアス・リッケンブロック氏

[通訳]

青木務津実氏



○説明者 炭鉱の方にご訪問いただきまして、ありがとうございました。

まず、皆様方にカード、こんなものをですね、はがきをお配りさせていただきたいと思えます。何て書いてあるんでしょうね。

これはですね、何かといいますと、今度、車で移動しているときに、車窓をちょっとごらんになってください。ドイツではこのような標識がありまして、上に、このように、何もバツテンのしていないもの、下にバツテンのしてあるもの、これ、まちの名前なんですね、このバツテンがしてあるところは、例えば下だったら、何が書いてあるかという、コーレンポットというまちはここで終わり、ここからメトロポール、ルールというまちが始まりますよという意味の標識なんです。メトロポール、ルールというまちはないんですけども、その標識を使って、IBAエムシャーパークのプロジェクトの大きなスローガンを示しました。コーレンポットというのは、コーレンというのは石炭のことなんですね、黒い石炭。ポットというのは、これはバケツという意味で、汚れたごみ箱ということなんです、つまりは、このまちは、そういうイメージだったわけです。汚れたものが、ごみ箱のように入るもの、汚い、人間が最終的に出すごみを処理するもの、そういうイメージがあったんですけど、今度からは違うよと。現在はメトロポール、ルール地方になりましたよということを示しているんです。

今、エムシャーパーク、このプロジェクトに関して、私、ちょっと皆様方に、簡単ではございますけれども、このようなものをご用意させていただきました。全員のところに行きましたならば始めさせていただきます。

今、エムシャーパークの目的、一口に言って、これで示されるように、裏舞台、見えなかった地域、つまり早い話、汚れた地域、これの再開発という意味です。

ここに地図があります。これをごらんください。これを見ていただきますと、あのあたりをライン・プール地方といいますけれど、これはライン・ルール地方の一部になります。これを見ていただきますと、東西に非常に細く伸びているのがわかります。このあたりのプロジェクト開発なんですけれど、この地域はライン地方の中でもエムシャー地域あるいはエムシャー地区と言われるところでございます。

このあたりの地区の特徴、かつてはどうだったかといいますと、やはりこのような炭鉱地、それからコークス工場、これが併設しているところでございまして、もちろん環境的には非常に汚れたところ、また、ここに住んでいる人たちも社会的に非常に立場の弱い方が住んでいる地域でございました。

このような悪いイメージばかり背負っていた区域なんですけれども、やはり構造転換をしなければいけない。ただ、構造転換というのは、どこの地域、どこの国でも同じことが言えるんですけども、経済ですね、新しい経済によって、必然的に構造転換は成るものなんです。皆さん、ご存じかどうかわかりませんが、ドイツで比較的良好に売れているノキア

という携帯電話のメーカーが、実は、この近くのボフミというまちにありまして、これもノルトライン・ヴェストファーレン州の方から、たっぷりと補助金をもらっていたにもかかわらず、今度、ルーマニアに引っ越しちゃうわけです。それで、何千人という職が失われるわけです。

このように、経済ですね、企業の動きによって、幾らでも構造転換をしてしまうということで、ただし、構造転換をするには、やっぱり大切なこと、つまり政策ですね、自治体の政策、これが長い間、残念ながら、この地域では見送られていたという事実があります。

また、先ほど、皆様方、鉄工のまちだというふうに、実はお聞きしたんですね。そのときに私も感じたんですけれども、私たちの事情をよくわかってくれる方々だなと感じたんですけれども。

同時に、このあたりは重工業、鉄工、製鉄所、精錬所で栄えたところなんです。残念ながら、80年代というのは、鉄工所、精錬所というのは物すごく下火になって、政府が大分補助金を出したにもかかわらず、やはりやっていけない状態になったという、炭鉱の閉山、それから鉄工所の閉鎖、下火になって、大きな2つの問題を抱えました。

そこで、ちょうど80年代に入ってから新しい施策を打ち出そうと。その施策なんですけれども、まず、私たちの地域というのは、ドイツの中でも大負けに負けてしまった地域と、救いようのない地域、それをどのように新しい形で、しかもポジティブに転換していくか。この構造転換ですね、これがまず第一のテーマとなりました。

州が立ち上がりましたのは1988年、ノルトライン・ヴェストファーレン州、IBAエムシャーパークプロジェクト、インターナショナル・アーキテクト・ア・エキシビション、このプロジェクトを開始しようというふうに議決されました。

例えば、このあたりには非常に大きな、いわゆる工場跡地というのが点在しているわけです。そういったものをどういうふうに再利用できるか、いろいろなアイデアをまず出しまして、そして、そのアイデアの中でも、どれを実行して、どんな形で進めるかというようなプロセスをまず踏みました。

このエムシャーパーク・プロジェクトにあたって、正式機関名なんですけれども、IBA GmbHという法的機関名を授けました。IBA、これはわかりますね、先ほどの省略形になるんですけど、GmbHはどういうことかといいますと、これ、有限会社になるわけなんです。でもおかしいじゃないかと。ノルトライン・ヴェストファーレン州で、やろうと言ったプロジェクトなのに、何で有限会社なんだと。私的な機関になるのはおかしいじゃないかということになるんですけれども。やはり公の機関が何かをやる、州が何かをやるというふうになりますと、余り市民もまちも自治体も期待を持たないんですね、どうせ州がやることだから大したことないだろうと。ちょこちょこっとやって終わりになるんだろうという、そういう印象を与えないために法的有限会社という機関名にしたわけです。ただし、実質的には、ノ

ルトライン・ヴェストファーレン州が100%所有の機関ということになります。

計画期間なんですけれども、10年計画でやろうということになりました。この10年間というのは、いろいろなプロジェクトが、かつてドイツで行われたわけなんですけれども、こういった建物が建てられる、あるいは建物再開発も入っているプロジェクトというのは、普通、プランが立ち上がって、ファイナンスの処理ができて、そして、建物が実際にでき上がるまで12年間かかるんです。ところが、2年短い10年間というのが非常に大切なポイントで、私たちも、実際誇っているところなんですけれども。その10年間のうちで126のプロジェクトが実際行われました。

ということは、ノルトライン・ヴェストファーレン州もそうですし、それからノルトライン・ヴェストファーレン州の下にある、ここの地域も、自治体もそうですし、それから一般の企業さん、それから建築家の方々、どの部分にも、やはりかなり圧力がかかっているわけです。早く終わりにしていけ、10年間しか時間がないぞという圧力です。

大切なことは、非常にお金のかかるプロジェクトなんですけれども、先ほど言ったように、あのあたりというのは、いわゆる階層からいくと非常に低い、社会的に低い方が住んでいるところで、労働者のまちだということで、このあたりの自治体というのは、どこもお金がないわけです。つまり、そのプロジェクトに投資するお金が全然ないわけです。じゃあ、どのあたりからお金を引き出してきたかといいますと、先ほど言った州のプロジェクトですから、ノルトライン・ヴェストファーレン州、それからEU、ヨーロッパ・ユニオン、それから、一般企業の投資家、こういった方からお金を収集しなきゃいけないということで、ファイナンスの面でもかなり圧力があつたわけです。つまり連邦政府は一切お金をこのプロジェクトに出さなかったわけです。

どんなプロジェクト、どんなに苦労した考えであるのか、アイデアですね。それから、そのアイデアを構築して、実際実現するためのプランになります。その後、財政の面ではどうか、ファイナンスの面ではどうか。最後に、実行というプロセスを踏んでまいります。

ちなみに、ちょっと前後しますけど、126のプロジェクトの自治体の数なんですけれども、全部で19の自治体、市町村ということになります。

こちらのインフォメーション、旧坑道なんですけれども、四角で囲ってある真ん中を見ていただけますか。このプロジェクトの代表者の名前があります。プロフェッサー・ドクターカール・ガンザーさん、この方がこのプロジェクトの取り締まった方ということになります。

ということは、先ほど言いました、今、I B A G m b H、有限会社の責任者ということになってくるわけです。

こちらのところに、業務内容がどうなっているかという監査役員の名前が載っております。ここが監査役です。この監査役というのは一般の方ではなくて、これは州政府の人間ということになってまいります。

こちらの一番左に、キュレーターの名前が書いてあるんですけども、このキュレーターの方はもう亡くなってしまいましたけれども、ノルトライン・ヴェストファーレン州の知事の方です。ヨハネス・ラオさんという方でした。こういったプロジェクトとか、普通はこういった知事さんがなったり、それから市町村の小市長や、大市長がなったり、つまり報酬をもらわない、報酬を受け取らないという形でのキュレーターになります。

ということは、こういったプロジェクトの場合は、キュレーターというのは、同時にスポークスマンの役割を果たします。つまり一般のテレビが来たり、新聞が来たり、メディア関係の人に公式の発言をするのは、この方ということになってまいります。

その横に最高委員会とあります。これが最高機関になってくるわけですけども、実際的なことをやります。いろいろなアイデア、あるいはプランがありまして、結局、最終的にどのプランを実行に移すかということを、決められるのが、こちらの最高委員会ということになります。

ということは、こちらでイエスと、それからノーの決定が下されるので、一番現実的なプロジェクトが始まる前に、一番現実的なことを背負う機関というのが、この最高委員会機関ということになります。

もう一つとして、現実的な役割かつ非常に重大な役割をするのが、この監査役の下にあるコレスポンデントなんですけれども、この方たち、53人ほど存在しておりました。彼らは監査機関というわけではないんですけども、一つ一つの可決されたプロジェクトは本当にクオリティーのあるものなのか、内容が充実しているものなのか、あるいはプロジェクトのケア、それから環境、そういったものにかかわるクオリティーで、本当にオーケーかどうか、あるいは建築家の方々のやりとりといったようなことまでやる機関がございます。

そして、その下に、幾つか分野が1、2、3、4、5というような形になっております。まず第1分野なんですけれども、1番左ですね、1とありますけども、雇用テクノロジー、それからエコロジープランです。

2番目に大きな柱といってもいいんですけども、エムシャー・ランドスケープパークというのがあります。マイドリッヒ公園なんかもこのエムシャー・ランドスケープパークの中に入っております。それから、エムシャーシステム、例のエムシャー川の水系の再開発ですね、エコロジー再開発、それが、まず2番目の柱です。

ランドスケープパークといいますと。先ほど言いましたように、工場地もたくさんありました。それから使われていない遊休地、たくさん広大な土地がありました。それを景観を含めた再生ということです。

多分、皆さん方のご興味があるところかと思えますけれど、エムシャーシステムのエコロジカルな再開発ということなんですけれども、エムシャーというのは川の名前なんです。エムシャー川という名前です。このあたりは、昔から炭鉱で、地上を掘っていたために、下水管

が引けなかったところなんです。その下水をどのような処理をしたかといいますと、エムシャー川に通したわけです。汚水がエムシャー川を通っていたんです、早い話が。もちろん当時から、フィルターとか通して、いろんなことをやっていたんですけれども、それでも、やはり1級河川とか2級河川にも及ばないということで、この河川をなるべく自然に近い形にしようではないかというのが、このエコロジカル・エムシャーシステム再開発ということになります。

3番目は、住宅再開発ということになります。もちろん快適な新しい住宅もたくさん建てたんですけれども、同時に大切なのは、昔からあった炭鉱労働者の住まい、炭住ですね、これを壊さずに、中だけモダン化して、そして改修工事をしていくというのが、3番目の住宅再開発になります。

4番目が、芸術文化、それから工業の歴史、それからツーリズムという部門になるんですけれども、昔の歴史的建造物を維持・保存すること、それによって、それぞれにあった地域の歴史を後世に伝えるということです。

もちろん、例えば4番目の部分に入る、今、我々が座っているところも観光地なんですけれども、そういったものを含めて、どのように開発していったかというのが、きっとご興味があるんじゃないかと思います。

2000年で、I B A G m b Hという機関名はなくなって、機関自体もなくなっているわけです。先ほどのお話で10年計画とありましたが、2000年で、この機関がなくなったというか、計画が終了したわけなんですけれども、1989年に始まったプロジェクトをどのように開発していったかと、恐らく皆さんはご興味のある点というところで、まず最初に、始まった年に、すべてのメディア、例えば新聞なんかが一番影響力がありました。ここの地域には、あなたはどのようなものが欲しいと思いますかというような記事を、いろいろなすべての地域に載せたわけです。ですから、これは企業も企業体としても対象になりますし、市町村、自治体のような1つの組織として対象になりますし、各家庭の個人の意見も対象になったわけです。

いろんなものがあったんですね、例えば精錬所、製鉄所の跡は、これは壊さないでほしいとか、それから、このルール工業地帯で結構強い1地区のサッカーチーム、シャルケというのがあるんですね、これがドイツのチャンピオンになったらいいと。ということは、つまりここのまちがもっとバックアップされて、ドイツ全国でも日陰でないまちになったらいいというような、そういった一般の市民の声をとにかく、すべて集めたわけです。

もちろん、その中で、これはどう考えても実現性には乏しいとかというのは、私たちが抜いて行って、こういう枠を決めないで、すべての方にそういった希望を聞いて、そこからチョイスしていったというのが現実です。

そして、先ほど言いました一番上の真ん中のほどに出ている委員会、協議会の方で、そう

いった抜粋されたアイデアというものが協議されます。そして、その中で落ちてしまうものと、それから、これを進めていこうじゃないかという推進計画の方に乗るものと、また、そこで分かれてくるわけです。

ですから、I B Aの機関が中心になって、すべてを取り仕切って、どここの建築会社に、こうして、こういうものを建てろと言うのではなくて、テレビでいう番組づくりの司会者的な役割をしたわけです。

それから、大切なのは建築上の質はどうか、こういった査定の役割をもちろん私たちはしました。そのほかにですね、建築的にどうか、そういった査定、それから詳細的にはどうか、社会的にはどうか、そういった査定も大切になってまいります。

例えば、ここの炭鉱跡は、I B Aエムシャーパークのプロジェクトの中の推進プログラムに加わることができたんですけど、現在、実はこの近くのゼントロという非常に大きなヨーロッパでも最大級と言われるモールショッピング街があるんです。これもその計画に入れてくれと言ってたんですけども、そこは実はこの計画には入らなかった。漏れたところということになります。つまり、それで何が言いたかったかといいますと、このプロジェクトが後世に長く続いていく、一過性のものでなくて、長続きしなきゃいけないということで、例えばそういったショッピングモールの的なものというものが除外された理由になります。

古い歴史的な建造物を残しながら、中では実際、現在の産業や、それから市民の要望に似合うようなものに使っていただく。そういったことが、やはりこの委員会の方で決定される大きな要因になります。

早い話が、ショッピングモールの的には、これは、やはり商業的な成功をねらったものですから、もしかしたら1年はいいかもしれないけど、3年にはつぶれてしまうということもあるかもしれない。そういうのは、じゃあ、プライベートな投資家の方々にやってくれということになったわけです。

また、ファイナンスのことで言いますと、先ほどのショッピングモールみたいなところは、一般の投資家の方にやっていただければいい。そういうところと一緒に組んで、商業利益を上げていけばいいということなんですけれど、I B Aとの大きな違いは、I B Aは、先ほども申し上げましたように、自治体自身では一銭もお金がなくて、つまり公の、いわゆるパブリシヤスなお金、このお金を基本にしてやったものです。ということは、I B A自身も失敗してはならない。高いクオリティーを保たなきゃいけないという圧力もあります。これは大きな一般の私立のプロジェクトと違うところです。

先ほども言いましたように、司会者的な役をしたわけで、これはアイデアはいいけれども、ちょっとお金が足りないよねというようなものも当然ありました。これから幾つかお写真を見せたいと思います。例えばゲルセンキルヘン市というところで、学術者パークという、こういう建物があるんですね、学術研究パークと言われているもの。この建物のアイデアは、

やはり新しい地に新しい産業を呼ばなきゃいけない、それには、やはり新しい学者が要るということで、この建物が立ったわけです。この建物の面積なんですけれども、ほぼ1万5000平米です。

当時、この建物が建ったとき、ソーラーエネルギーというのは、ヨーロッパでは、ちょうど開発の最盛期を迎えていた時期になります。ソーラーエネルギーといっても、非常に高い端子構造を持つような機体を搭載するものもありますけれども、そこで、私たち、IBAの役割として、ソーラーエネルギーといってもいろいろあるけれども、こういうのはどうだとかというような形で、いわゆる非常にコストのかからないパッシブソーラー、つまり、ここをガラス張りにして、なるべく太陽熱を自然に受け入れようというようなアイデア、これなんか、例えばIBAの方から提案したものです。ちなみに、EU基金の方から大分補助をいただいたものなんですけれども、1,000万ユーロです。

もちろん、このようなお天気の良い国ですから、そんなこといったって、太陽が照らないから、パッシブソーラーなんか全然役に立たないんですよということになってくるんですけど。いつも年間、これだけで賄えるわけではなくて、天井の方にはフォトボルトタイプ型のソーラー収集パネル、これを備えつけてあります。例えば、そういうことを備えつけるときに、建築家の方、こういった技術的な相談が必要になってくるわけです。

そして、フォトボルトタイプ型のパネル板と、それから、先ほど言ったパッシブ熱量という形で、この中のオフィスの暖房、それから電気、それから給湯ですね、これすべて賄っております。

この学術パークでも、特にソーラーの研究、ソーラーの開発というのは力を入れておまして、30年前は、ゲルゼンキルヘン市というのは、炭鉱のど真ん中のまちというふうに言われていたんですけど、今では、ソーラー開発のまちというふうに言われるようになりました。このようなプロジェクトを1つ入れただけで、大分、実際のまちのイメージもころっと変化してしまったといういい例です。

自治体というのは、大体このように見たら、よろしいんじゃないでしょうか。実は、本日、皆様方、日本からのお客様をお迎えするのは初めてではないんです。何グループもお迎えしました。同じように、うちの自治体にはこういう問題がある、ああいう問題があるというふうに打ち明けられました。

つまりプロジェクトを担う機関が、いろんなところからお金を集めて、そこから、はい、君のところにこれをあげるよ、これをやりなさいというのではなくて、やはり補助的な役割、何度も言いましたように、司会者的な役割、これがやはり大切なんじゃないかと思います。

それでは、非常に簡単なんですけれども、皆様方、このあたりで何かご質問というのはございませんか。

○西議員 さっきおっしゃられていた幾つかの重点的ということですけど、IBAのファイナ